

立志式について

一、『立志』ということば

古代中国の偉大な思想家であり、儒教の祖である孔子（B.C. 五五〇～B.C. 四七九）のことばや行動をしるした「論語」という書物の中に、次のような一説がある。

『吾十有五而志乎学、三十而立、四十而不惑……』

私は、十五歳になったとき学問に強く心をひかれ、一所懸命勉強しようと決心した。

三〇歳になったとき、熱心に勉強したかいがあつてようやく一人前になったと思えるようになった。

四〇歳ではもうあれこれ迷うことなく、自分が決めた道を進める自信がついてきた……

十五歳のとき孔子は自分が進むべき方向を見つけ、それに向かって一生懸命努力しようと決意したという。このことから数え年の十五歳（今の中学二年生の歳）を「立志」（志を立てる）と呼ぶようになった。

二、『立志』の意味

数え年の十五歳というのは、いろいろな意味で「こども」から「おとな」になる年齢と考えられる。日本でも古代から「おとな」にな

る儀式が行われてきた。奈良・平安時代には「初冠」という儀式があり、そのときから成人だけが許される「結髪加冠」（髪を結い、冠や烏帽子をかぶる）の服装ができた。女子も「おとな」の服装である「裳」（スカート）をつけることができた。「元服」ともいわれ、やがて貴族の間だけでなく、武士社会でも行われるようになっていった。

武士の社会では、幼児の稚児髪（おかっぱやこどもふうのまげ）から「おとな」の武士のシンボルであるいわゆる「ちょんまげ」に変えた。また、「おとな」のしるしとして、名前も幼名から「おとな」らしいものに変えて名乗るようになった。（源義経の場合は、幼名「牛若丸」から「九郎義経」と改名した。）

一般庶民の間でも、これに似たことが行われてきた。町や村には、それぞれ「若者組」というものがあり、これに加入することが「おとな」になることであった。「おとな」になることは、「ムラ」（共同体社会）で一人前として認められることであり、お祭りや共同作業、いろいろな相談事などに参加できるようになり、いろいろな分け前をもらう資格も与えられた。言い換えれば、お祭りや共同作業や相談事に参加しなければならぬ義務を負うことでもあり、いろいろな「おとな」社会の約束ごとを守らなければならない責任が伴うことでもあった。つまり、若者組への加入は少年・少女の時期から社会的責任をもつ成人になることであり、責任を果たさなかったり、約束事を守らなかったりしたとき、「ムラ」の社会に参加させられなかった。いわゆる「ムラ八分」である。

三、『おとな』になる儀式

「おとな」になるためには、一つの儀式を通らなければならなかった。様々な呼び方があったが、もっとも一般的だったのが「元服」である。

このよび方は貴族・武士はもちろん、一般庶民の間でも使われた。儀式は、貴族や武士社会のようなことも行われたが、もっと様々なことも一般庶民の場合にはあった。会津にあった十三歳での十三参り、十六歳での飯豊登山などもその一つである。十六歳の飯豊登山では、登る前に一週間「行屋」にこもり、水垢離（みずごり）をとって身を清め、白装束で身をかため険しい山道を「六根清浄」（欲望をおいはらって身を清らかにする）と唱えながら登ったという。

四、『立志式』を行う意義

三島中学校は、晴れて立志の年を迎えた二年生の成長を喜び、そしてこれからも末永く健やかに生きてほしいという思いを込め、入学式・卒業証書授与式と並ぶ儀式的行事として立志式を挙行する。少年・少女の時期から社会的責任をもつ成人に一步近づいたことを自覚し、自分の将来に責任をもてる中学生になってほしいという強い願いがそこにある。

三島町はその趣旨に賛同され、名産である桐を材料とした額と、会場となる町の公共施設を惜しげもなくご提供くださる。保護者の皆様はこの日のために時間をつくり会場に駆けつけ、我が子の晴れ姿にしみじみと感じ入る。一年生は二年生を憧憬の思いで見つめ、三年生は一年前に立志を果たした人生の先輩として二年生に励ましの言葉を贈る。そして二年生は、授与された立志証書を手に、そこ

に掲げた立志の言葉を強い決意とともに述べ、立てた志を終生その胸に刻み目指し続けることを一同に誓う。これが三島中学校の立志式である。

孔子が志を立ててから二五〇〇年。立志式は、目標や夢に向かう尊さを今に伝える三島中学校の大切な行事である。